

哲理なき現状維持

改憲や「大軍拡」の動きが危惧される。憲法が蹂躪された戦前の昭和史に詳しいノンフィクション作家の保坂正康さんインタビュー(朝日 5 日朝刊)を抜粋して紹介したい。—今回の選挙結果は何を意味すると考えていますか。

「三つの分析をしています。一つは国民は何にも増して現状維持を望んだということです。とにもかくにも現状の安定を求めたと思います」

「二つ目は、日本維新の会や公明党、国民民主党など、自民党に考え方や政策などで近接した政党が伸びたということです、逆に距離感がある立憲民主党や共産党が減りました。総体的に保守勢力の追認という枠内にあり、護憲・戦後体制の崩壊、あるいは空洞化という結果になった。戦争体験などは検証されず、戦後が死んでいくのか、という思いを強く持ちます」

「そして立法府の無力化が更に進むのではないか、という懸念が三つ目です。野党が生き延びるには、立法府で自分たちの政策を明確にして政権と戦うことが必要ですが、与党はなかなか国会を開きません。戦後の議会政治の歩みの中で、今ほど無性格、無人格、無哲学なことはなかったでしょう」

「つまりは哲理なき現状維持です。衆院選で展開されたのは政策論争とは無縁の選挙運動で、この国をどこに持っていくのか全く不明で、先行きに恐ろしささえ感じます」—二つ目の点に関しては、維新の躍進で、改憲容認勢力が 3 分の 2 超に達しました。「戦後の終焉とは、そうした結果を踏まえたからです。具体的にどの条文という前に、改憲するという大綱をかけて議論をしていくのでしょうか、混乱するでしょう。今の憲法は非軍事的憲法で、戦争体験という歴史と対になっています。日本やドイツは国連憲章の中で連合国に対する『敵国』にくくられており、条文、とりわけ 9 条に手を加えることがどう受け止められるか。狭い視野だけでは語れません。歴史的に議論すべきことが数多くあるのです」

—三つ目の点では与党の多数支配という基本構造が続きます。

「安倍、菅政権で、政府の意向が先行し、国会があつてなきような『行政の独裁』ともいえるべき状況が続いて来ました。衆院選では、立法府が復権できるのかどうかや、有権者が政治に参加する意味が問われたと思います」

—岸田政権も、憲法を軽んじる姿勢は同じということですか。

「憲法が国政の大前提としている議論の大切さを考えれば、首相指名された後、予算委員会も開かないで解散総選挙に打って出た岸田首相の姿勢は、安倍、菅両政権による憲法をないがしろにする政治と同種と見なさざるを得ません。極めて残念です。現在の政治で最も問われていることは、どうしたら憲法を、どうしたら参政権を、どうしたら立法府を生かすことができるか、だと思います」

(2021 年 11 月 8 日)